

るなるえあ
〜天羽狐の創作室〜
三々梨弥生

「Traveler's」

〜線路歷程〜

「Traveler's ～線路歷程～」

三々梨 弥生

〈I〉——あるいは「私」。
またの名を「旅人」。

荒れ野のど真ん中に、線路が一本、のびていた。

〈I〉は、線路にそって旅をしている。

途中、いくつもの炭鉱町を通り抜けた。どこにも人はおらず、町は空っぽの廃墟になっていた。

何度目かの廃墟を通り過ぎて、それでも歩き続けていると、線路の上に家のような影が立っているのに出くわした。

近づいてみると、それは機関車だった。客車が一つついて
いる。

機関車は停まっていた。頭は線路の先を向いている。そ
してその隣の地面に、大きな穴が開いていた。

ぽっかりと空いた暗い穴を覗いてみると、さほど深くな
い（といっても浅くもない）所に底があった。そこまでハ
シゴがかかっている、穴の底では老人が一人、ツルハシと
シャベルを交互に使い、ひたすら地面を掘っていた。

〈I〉は、
「何をなさっているんです？」

と穴の底に向かって訊ねてみた。

老人は穴の淵を見上げた。

「探し物をしているのさ」手を休めてそう答え、「こんな
荒れ野の真ん中で、何をしておいでだい？」

と、逆に問いかけた。

〈I〉は答える。

「線路の先を知りたくて」

「歩いてかい！ そいつは、ご苦労なことだ」言いながら、
老人は穴の底に向かってツルハシを振り上げた。

「そっちの方が、よっぽど苦勞なさっていいそうですね……」

ちよつとムツとして言う。

すると、

「昔はね、こんなことをしなくても、すぐに汽車なんて動かせたのさ」

老人はツルハシを置くと、ハシゴを使って、穴から地表へと出てきた。機関車のすぐそばに腰を下ろす。そうして隣の地面をポンポンと手で叩いた。へいへいは老人の隣ではなく、斜め前に腰を落ち着けた。

「まあ、いいが……」

老人はほんの少し不満そうにしてから、

「さて、若い人。この汽車は、何を燃やして動くか知ってるかい？」

「いいえ」

「普通は石炭を燃やして動かす。でも、この辺りじゃあ、

《七色石》なないろいしを使うんだ」

《七色石》？」

土で汚れた両手が、こぶし程の大きさの丸を作る。

「これくらいの大きさの石でな。七色に光るものだから、遠くの土地では宝石としても高く売れる。しかし、こいつの最も優れた点は、そのエネルギーさ。一つ燃やすだけで、汽車を何十キロも走らせることができるんだ」

「それは……便利ですね」

「ああ、便利だ。だから皆、炭鉱町を造って《七色石》を掘ったのさ——」

老人は語り始めた。

「ここがまだ荒れ野でなかった頃は、線路の先へ行くために、毎日何台もの汽車が列を連ねていたもんさ。煙突から吐き出された煙の、七色の塵が空を覆って、昼間でも満天の星空みたいだったね。」

《七色石》で走る汽車に、《七色石》をどっさりと積んで、遠くの町まで運ぶんだ。誰もが石を欲しがって、石は飛ぶように売れた。

それがそのうち、石が採れなくなってきた。《七色石》が無限じゃないのだとようやく誰もが悟った頃には、すっかり掘りつくした後だった。

もつ、線路の先なんか、誰も見ちゃいない——おっと、お前さんは別だっけね——皆は、石の無くなった大地を捨てて、もつと石のある土地を探しに行っちまったんだよ。

あの、七色の光に囲まれているのが当たり前だった頃のことを、今でも忘れられないんだろう。私もたまにそう思うから、その気持ちはよくわかる——

「だから、掘っているんですか？」

〈I〉は口を挟んだ。

「……いや。石を探すのは、こいつを動かす為さ」

老人は機関車の車体を親しげに叩く。そして立ち上がり、穴の方へと歩き始めた。

その後ろ姿に声をかける。

「掘っても無駄では？ 石は、もう採れないんでしょう？」

「確かに、昔ほど簡単には見つからないけれどね。……それでも、《七色石》はあるんだよ。小さな欠片でも。こうして、しゃべっている間にも、少しずつ形になっていくんだ」

「作れるものなのですか？」

「作ろうと思って作れるもんじゃない。大気中を漂う目に見えない細かい光が、雨と一緒に降り注いで大地に染み込み、長い長い年月をかけて土の深い所に積もっていく。また、大地に溢れる日が来るさ。……まあ、それを見つけれらるかどうかは、神様の気まぐれだがね」

ウインクを一つ投げてよこして、老人はするするとハシゴを下りていった。

ツルハシとシャベルの音を背中で聞きながら、〈I〉は機関車の横を通り過ぎ、その場を後にした。

夜になった。

線路から少し離れた所で休んでいる〈I〉のもとに、重い車輪の音が届いた。機関車だ。

ゴトン、ゴトン！

十分に近づいたところで、眩しい運転席から、見覚えのある老人が身を乗り出した。手を振って、

「若い人！ 乗って行くかい？」

「ありがとうございます。でも大丈夫！ 線路の先へは、

Traveler's ～線路歷程～

自分の足で行きますから」

「そうかい。それじゃあ、いつかまた、線路の先で会える
といいな！」

汽笛が高らかに鳴り響く。

機関車はスピードを上げて〈I〉のそばを通り過ぎた。

夜の荒野を突っ切って、機関車は疾駆する。

七色に輝く煙が吹き上がる。

星空を背に、色とりどりの光の塵を振りまきながら、脇
目も振らずに駆け抜けていった。

〈I〉は、静かに微笑んだ。そうして、荒野にのびた
線路にそって、ゆっくりと先へ向かって歩き始めた。

【End】

《奥付》

作品名・「Traveler's ～線路歷程～」

作者名・三々梨弥生

初回公開年月日・二〇一三年三月八日

公開ホームページ・「るなるえあ ～天羽狐の創作室」

URL <http://una-te-air.vivian.jp/index.html>